

今、ぼくががんばっていること

濱崎 釉色

富山県立草島小学校 五年

今、ぼくは支援級にいます。なぜなら、人との関わりが苦手だからです。

家では、すらすらと話すことができるのに一歩外に出ると、のどに何かがつまったように声が出なくなり、話すことができません。また、なぜだか分からないけれど、いつも不安な気持ちでいっぱいになります。そんなとき、

「場面かんもく症」

と言われました。家族や先生の手を借りて、年長のとときにやっと幼稚園に慣れ、登園できるようになりました。もうこれで小学校生活も大丈夫と思っていました。しかし、小学校に入学すると、学校や周りの人の空気が、がらりと変わりました。慣れようと努力してもついていけなくなり、学校へ行けなくなっていました。やっぱり人が大きい。でも、勉強もしたいし、友だちもほしいという気持ちは今ももっています。このままではいけないと思っていたところ、発達障害の診断を受けました。それから、ぼくは、

自分の特徴がちよつとずつ分かるようになり、今までよりも先生方に気にかけてもらえるようになりました。先生にもっていた、もやもやとした気持ちが徐々になくなっていました。

そして、二年生のとき、保健室登校と通級指導教室に行けるようになり、通級の先生や保健室の先生など、話せる先生が増えていきました。

そんなある日、担任の先生から、

「釉色さん、学校で安心できる場所を増やしませんか。一度、支援級の教室をのぞいて見ませんか。」

と誘ってもらいました。行ってみたら、とても楽しくて、クラスの友達と関わることがこんなにわくわくすることとは、思いませんでした。だから、学校へ行ける日が少しずつ増えました。さらに行事にも興味をもち、思い切つて参加することができました。けれども心の疲れがたまり、また学校へ行けなくなる日が増えていきました。せつかく支

援級に移ったのにどうしよう、と不安な日々が始まりました。しばらくして、母に、

「今度、放課後等デイサービスに行ってみんげ。」

と言われ、不安だったけれど、何か変わるのではないかといい、行ってみることにしました。そこは、ぼくにとても、とても安心できる場所でした。指導員の方がとても寄り添ってくれて、いろいろなことを教わるうちに、自分に自信がもてるようになってきました。

五年生になって、担任の先生と、

「交流級で十五分間授業を受けてみよう。」

と約束しました。交流級で十五分間授業を受けていると、交流級の友達に声をかけてもらえるようになり、だんだんとこの中に入りたいと思えるようになりました。そして、一学期の終わりには、交流級の授業に最初から最後まで出られるようになりました。

ぼくはこの経験を通して、前より心が少し軽くなりました。それは、自分にちよつぴり自信がもてるようになってきたこと、支援級や交流級の友だちと関わることで、人は怖くないということが分かってきたからです。

これからは、支援級とか交流級とか関係なく、いろいろな人とふれあうことで、ぼくがどんなふうに変わっていくのか不安だけど楽しみです。また、ぼくと同じようなこと

で困っている人がいたら、家族や先生、友だちがぼくのそばで力づけてくれたように、ぼくもそういうことができる人になりたいです。

かかのしょうがい体けんをしてわかったこと

名古屋市立八事東小学校一年
藤本千尋

「かかのしょうがいは体けんできないの？」

車いす体けんをしたかえりみち、わたしはかかにききました。かかがてちょうをもっているのはしってるけど、どんな体けんをしているかはよくしらないときづいたからです。かかのことも、しょうがいのことももっとしりたい。わたしはかかに、「かかのしょうがい体けん」をおねがいしました。

さいしょのチャンスはとつぜんやってきました。目のびょういんにいったとき、かかが

「このけんさ、にがてな光ににてるかも。」
といったのです。ちよつとわくわくしながら、目をあけてまってる、「ピカッ」と目に光がさりました。まぶしい！わたしはとてもびつくりして、目をなん回もぎゅつとじました。ライトがきえてからも、目の中に光がのこつていてチカチカします。じゃまだなあ、いやだなあ。だからかか、よく目をこすってたんだ。わたしはまえに、まぶ

え、そうだっけ？みんなのことなんてぜんぜんみてなかった。きこえなくてもかかがおしゃべりできるのは、このおかげだったんだときづいて、すごいなとおもいました。

それから、かかはじぶんのことをおしえてくれました。キャンプでスープをのむとき、「ひにかけて」とわたされたおなべのみずを、ひにジャーとかけてけて、おこられたこと。「ちよつと」とか「ちゃんと」といわれても、どうしたらいいのかわからないこと。むちゅうになると、ごはんもねるのもトイレもわすれちゃうこと。でもきづいたら、どんどんべつのことをはじめてること。

「わたしもそういうときあるよ。」
はげましたくていったけど、かかはこまったかおでわらいました。

「そうだね。でもかかはまい日、ずっとなんだ。まい日だと、どうかかな？」

そういわれて、かかがよく「どうしてわからないの？なん回もいつてるのに！」とおこられることとおもいました。わたしもそうおもったことがあります。かかはまい日いやなきもちがいつぱいになるからげんきがでないんだ。たまにこまるのと、しょうがいでこまるのはちがうんだとわかりました。

かかのしょうがい体けんをして、わたしはかかのきもち

しがるかかに「キラキラでいいじゃん。」といったことをおもいだしてあやまりました。

つぎは、おうちの中で。テレビにやきゅうのおにいさんたちがうつったときです。

「おにいさんたちなんていつてるかわかる？」

よくきいてみたけど、「しゃっしゃー」とか「あーした」とかしかきこえません。テレビの人やほかの音が大きくなっててもじゃまです。音を大きくしてみたけど、うるさくなっただけでいみはわからないまま。でもテレビの人たちも、かかもわかつているみたいだったので、わたしだけおいてきぼりにされたみたいなきもちになりました。でも、

「なんていつてたの？」

とこたえをきいたら、かかは「さあ？」とわらいました。なんと、テキストにわらっていただけだったのです。

「きこえないけど、たのしそうだとか、がんばってるなっていうのはわかるから。」

までしることができました。車いすの体けんときは、たいへんそうとおもったけど、ちよつとたのしいとおもっていました。ほんとうに車いすですごしている人はどんなきもちなんだろう？きいたり、ふれあってみないとわからないことだらけだとおもいました。それに、いっしょにすぐす人のきもちもです。かかと体けんするうちに、わたしもじぶんのきもちや大へんなことがあるのにきづきました。体けん中かかに「たまにたすけるのがめんどくさい」と正じきにいったら、かかはなぜかうれしそうにわらってくれました。じっさいのふれあいの中であいてをやって、おもいやりをもって、でもしょうじきに、これからもそうやって、しょうがいのある人もたくさんふれあっていきたいです。

ヘルプマークを知^しってほしい！

村^{むら}上^{かみ}立^{りつ}騎^き

今^{いま}治^ち市^し立^{たち}花^{はな}小^こ学^{がく}校^{こう}五^ご年^{ねん}

みなさんは、ヘルプマークを知っていますか。ヘルプマークは、しよう書やしっかんなどがあることが外見からは分からない人が、支えんや配りよを必要としていることを周囲に知らせることが出来るマークです。ぼくがどうして知っているかというと、ぼくの兄が自閉しよう書を持っていて、その兄がいつもこのマークをリュックに付けているからです。

三年前、ぼくと兄と母で、テーマパークAとテーマパークBに行きました。ぼくは、小学二年、兄は高校一年生でした。松山空港の東京行き飛行機に乗るゲートの人数は、連休で人がかなりならんでいました。ぼくと兄は、手遊びしながら立っていると、近くにすわっていた人が、「ここ、よかつたらどうぞ。」

と、言つて席をゆずってくれました。ぼく達は、お礼を言つて二人ですわりました。後で母に理由を聞くと、たぶん兄のヘルプマークを見たんじゃないかということでした。ぼくは、わからないです。しかし、ヘルプマークのおかげなのか、テーマパークAやBの乗り物待ちでならんでいる時も、モノレールやバスの中でも、食事している時も、周りの人が配りよしてくれたと思ひ、ぼく達はとても楽しい旅行になりました。

それからぼくは、時々ヘルプマークをつけている人を見かけるようになりました。いやこれまでもヘルプマークを持っている人はいたと思ひますが、ぼくが気づいていなかったんだと思ひます。スーパーで買い物している時や駅やバスでいなどでも、付けている人を見かけたことがあります。ヘルプマークが、支えんや配りよが必要ですと教えてくれるので、ぼくは少し待とうかと思ひようになり、気持ちがあゆんだりします。まだ、何か自分から声をかけたり、支えんをしたことはありませんが、何か困った様子を見つけたらすぐ声をかけられるように心がけていこうと思ひます。

今、兄は高校を卒業し、しよう書者しせつで働いています。少しずつ自立に向けて、一人で近くのスーパーへ買い物へ行く練習しています。いつものリュックにヘルプマークをつけて。もつともつとたくさんの方が、ヘルプマークを知つて、しよう書やしっかんのある人達が、くらしやすい温かい地いきを作つていけたらいいなと思ひます。

くは、とても感動したのを覚えています。なぜなら、何も言わなくても周りの人が配りよしてくれたのを初めて実感したからです。

羽田空港に着いて、テーマパークAに向かうリズムバスの中でもありました。車内は満員で、兄は真ん中のほじょ席にすわっていました。通路をはさんで母が、兄の後ろにぼくがすわっていました。車内は静かでしたが、兄はしばらくすると、声を出してしまいました。母は、静かにというシーというポーズを兄に合図をしていて、何度かそれをくり返していましたが、急に大きな笑い声と前の人のかみをさわってしまった。前の人はおどろいてふり返りましたが、兄と母のやりとりや、ひざにのせていたリュックについていたヘルプマークのおかげか、何もなかったようにしてくれて、おおごとにならずにすみました。後ろにいたぼくも、ホッとしたので、見た目だけではしよう書がある

兄は高校生だったので、見た目だけではしよう書がある